救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry
2月号
福音版
2024
February
No.2865

二〇二四年　二月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行

レントに咲くバラ

西村　和江

冬のガーデニングを楽しむ人々に近年大変人気なのが、クリスマスローズです。冬の季節に可憐な花をつけ、和名では「初雪起こし」とも言われているとおり、たとえ雪の中でもその慎ましい姿で見るものを楽しませています。日本でよく見るクリスマスローズは二月から三月に花をつけており、多くの人はクリスマスではないのに、なぜクリスマスローズと呼ばれるのかと疑問に感じているかもしれません。

地中海沿岸から中部ヨーロッパ生まれのこの花は、もともとの品種が十二月に花をつけるクリスマスローズと、二月から三月に花をつけるレンテンローズの二種類に分かれているのですが、日本ではどちらもクリスマスローズの名前で親しまれるようになったという経緯があるようです。

レンテンローズの名前は「レントに咲くバラ」という意味ですが、「レント」が何を意味するかご存じでしょうか？

キリスト教の暦を意識したカレンダーには、二月中旬の水曜日に「レントに入る」または、「灰の水曜日」と記されています。レントとは「受難節」を意味しています。イースター（復活祭）に備える準備期間として、イースターまでの日曜日を除く四十日間、キリストの十字架という受難の出来事を心に留めつつ過ごします。今年は二月十四日からレントが始まります。

ふだん、私たちの心は地位や名声、物や金銭、快楽といった様々なものを求めがちですが、この時期は特に、自分の弱さや罪と向き合い、祈りを献げる時を過ごしたいと願っています。

なぜなら、イエス・キリストの十字架の苦しみは、すべての人を罪から救うためであったからです。イエスは罪を一つも犯さなかったにもかかわらず、当時の宗教指導者の妬みと弟子の裏切りによって逮捕され、不当な裁判にかけられ、罪人として、十字架という痛ましい刑罰を受けて死なれました。

聖書は、逮捕から十字架に至る受難の出来事の中でイエスと弟子たちの生々しい姿を描いています。ユダという弟子は、金貨を受け取ってイエスを売り渡したのち失敗に気づきますが、もう神の赦しを信じることができずに自ら命を絶ちます。同じくイエスを知らないと宣言して裏切ってしまったもう一人の弟子ペトロは、罪を悔いて激しく泣きますが、後にイエスのもとに立ち返りました。

光と闇が交差するようなこれらの人間ドラマは、決して他人事ではなく、私たちの心の中に存在する日々の葛藤にも重なるのではないでしょうか。頭ではわかっているのに口をついて出てくる言葉は時に人を傷つけ、他の人よりも自分を甘やかしてしまう、そのような行動や言葉を引き起こす、罪がすべての人の心に潜んでいるからです。

そのような私たちのためにこそ、イエスは十字架にかかられました。すべての人の罪を担い、十字架の苦しみを受けた救い主イエス・キリストによって、わたしたちの罪が必ず赦され、救われる道が開かれたのです。聖書にこうあります。

「彼の受けた懲らしめによって　わたしたちに平和が与えられ　彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」（イザヤ書53章5節）

このレントの季節、寒さの中に立ち続けるレンテンローズを見る時に、この約束を思い出してください。春を待ち、咲き続ける美しい花々のように、苦難の時期を乗り越えることができますように。皆さんの心が光の春に向かって守られ支えられるように、とお祈りいたします。

（救世軍士官〔伝道者〕）

信仰の体験談　証言のページ

今ここで、神の愛の中に生かされて

2023年11月、「がん哲学カフェ」のクリスマス集会で。「がん哲学カフェ」の提唱者樋野興夫氏と、筆者（左）と夫（右）

髙畠　恵子 さん
救世軍士官（伝道者）

がんは今や、日本人にとって身近な病気とも言えますが、当事者の痛みや苦しみは、他者には理解しがたいものです。突然のがん告知を受けてから手術、治療の日々の中で、命、死、生き方について深く顧みる経験をした、髙畠さんの証言です。

突然の告知を受けて

がん家系でもなく、三大原因の喫煙、飲酒もなく肥満でもない私がある日、突然膵臓がんの告知を受けました。

それは二〇一八年の四月、次女と長女は中学、高校の入学式の翌日、長男は海外に旅立って一週間後、末娘が三歳の誕生日を迎えたばかりの時でした。医師の説明を聞くたびに激しい睡魔に襲われ、病院に入ると風景がすべて灰色に見えました。強いストレスに体が反応していたのです。一カ月以内に手術すれば間に合う、手術と抗がん剤治療をしても五年生存率は一五％、と言われ、「死にたくない」と神に命乞いをしました。

十代から二十代前半まで悩み苦しみ、何度も確実に自分で死ぬ方法を考えて生きていた時は「自分の命くらい自分でどうにでもできる」と思っていました。結婚して夫婦で救世軍の士官（伝道者）となった時は、神と人の救いのために命を捨てるものだと神に誓う際、「命くらいいつでも捨てられる」と思いました。死に損なった経験があるので、怖くない、できると思ったのです。そして子育てと奉仕とに葛藤しながら毎日が目まぐるしく過ぎていました。死にたい気持ちは消えていましたが、それでもずっと自分の心と霊的な不自由を感じながら生きていました。でもこの時は、心から「死にたくない」と思ったのです。

この厳しいがんの状況の時に霊的同伴者が与えられました。霊的同伴とは信仰の旅路、魂の旅路を共に歩んで行く働きです。学びと訓練を受けた同伴者に、自分の霊的部分の話を安全安心が保障されている中で話すことができます。聖霊なる神に導かれ気づき、助けや慰めや慈しみをいただき、時には識別を手伝ってもらい、魂の旅路を歩んでいくのです。（私自身は、がんになる三年前からこの学びをしていました。）

突然の危機、出来事が起こった時には、それが他者から来るものか、自分の罪から来るものか、神から来るものかを識別すると学びました。私のがんは誰かのせいではなく、自分の体に起きている事だけれども、少なくとも自分の罪（自堕落な生活など）からということではない、と思いました。そうすると、このがんは神が意志をもって私に与えたものだ、と私は思いました。このがんは、自分の霊的不自由と、命や存在、引いては他者を軽く見てしまうことについて、神と深く向き合うためのものであると思ったのです。

とはいえ、突然がんの世界に放り込まれ、専門用語の理解から始まり、ネット検索でも、どの意見やサイトを信用したらよいか、治療の選択、家族のこと、生き延びるための「判断と決断」に追われました。がんの世界が人間関係や経済など巨大であることも知りました。

そのころ、私たち家族は救世軍新光館という、生活保護を受給している男性三十七人の方々を支援する施設の中で生活していました。ほとんどの方が精神的な病気を患っておられましたが、がんの人や難病の人もおられました。家族や知人とは疎遠で孤独な方ばかりです。告知を一人で受け、治療や闘病も孤独の中でしなくてはなりません。一方で私は、がん告知から手術、抗がん剤治療、経過観察の中で、家族をはじめ多くの方々の祈り、支え、助けをいただき、「恵まれた環境」で過ごしていました。夜、毎晩のように、布団に入り天井を見た時に、この天井の上には、同じがんでも孤独で過酷な環境の人もいると思いました。命の重さ、尊さは同じと言うけれど、日本の医療制度はすばらしいと言うけれど、現実は命や存在の格差があることを感じました。

制度や格差などに対して私が何かを変えるようなことはできませんが、がんや厳しい病気の方の心を共にすることはできるのかもしれないと思いました。それ

が数年後に主催することになる「がん哲学カフェ」の原点です。

心と魂は自由だと気づいて

手術は十二指腸、膵頭部、胃の一部の切除で八時間かかりました。目覚めた時にお腹から数本のチューブが、口や両手にもチューブや点滴などが繋がっていました。命を繋ぐために当たり前のものと頭で理解しても「全く動けない拘束された状態」が、何かそれまでの自分の心や魂が不自由であったことの象徴のように感じ、永遠に続くように錯覚してしまいました。しかしその瞬間、「体は繋がれていても心は自由ではないか」と気づきました。気づいたというより静かな声が心の底から響いた感じです。はっとしました。確かに全身繋がれていて身動きはできないけれども、心と魂は何にも繋がれていない！　それは事実です。状況は不自由でも私は自由だと思いました。聖書の言葉の「キリストはわたしたちを自由の身にしてくださったのです」（ガラテヤの信徒の手紙5章1節）という言葉が思い浮かびました。

心の深呼吸ができた、そんな時でした。だったら、この状況に不満や不安を訴えるのではなく感謝したい、そう思いました。心は自由だから何を感じ思うのも自由、その自由をどう使うのかも自由だけれども「キリストが自由にしてくださった」ので、その自由をキリストと共に使いたいと思ったのです。ナースコールのボタンを押す指しか動かせない身体でも、心は自由ですし時間もたくさんあります。主治医、スタッフ、家族、支えてくださっている方々、祈ってくださる方々、思いつく限りの方の名前と顔を思い浮かべて感謝と祝福の祈りを献げました。そんなに長い時間ではなかったと思いますが、それまで経験した祈りの中で最も神と深く交わった時でした。

もう一つ印象に残ることがありました。術後、三十センチ切ったお腹の傷や切り取られた内臓の激痛が数日間ありました。夜眠っている間は痛みで起きることはありませんでしたが、目覚めた瞬間から激痛に襲われました。目が覚めなければ痛みを感じないのに……回復するまで眠ったままでいたいと思ったほどです。その時に、神がアダムからエバを造られた時に「人（アダム）を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた」（創世記2章21節）という物語を思いました。眠りに落とされたアダムに対する神の慈しみが迫りました。（だって起きている時に麻酔なしであばら骨を抜き取るなんて痛すぎます。）世界で最初の外科手術でしょうか。そして目が覚める＝意識して生きることは、心身共に痛みを感じ、痛みと共に生きていくものなんだと思いました。回復途上の激痛の中にあっても神はその物語によって慰めと励ましをくださいました。

がんと折り合いを付けながら

よく、「がんと戦う」とか「闘病」と言います。がん以前の私は、絶対にがんに勝ち、乗り越えると闘志を燃やしていたと思います。でも実際にがんになり、霊的同伴を受けてからは、もちろん治るために全力で臨むのですが、「戦うことありき」ではなくなっていました。戦うということは勝つか負けるかのどちらかです。それより、吊り橋を渡るように、揺れながらでも、しなやかに、なんとか向こうまで渡り切るような、五分五分にもっていけたら。戦うのではなく、がんと折り合いをつけていく道がいいと思いました。それは不確かでモヤがかかっている灰色の世界のように思えましたが、灰色にも濃淡があり、その境に神がたたずんでおられると気づかせていただきました。これも、がんになったからだと言えます。

「キャンサーギフト」という言葉があります。がんになったからこそ出会えた人々、大切なことへの気づきなどを指します。私は最初、そんなものはいらないし、がんにならなければよかったと思いました。今でも二度とがんになりたくないと思っています。しかしこのがんになったからこそ出会えた人がいて、神と深く交わる時となり、考え方や生き方が変えられたという事実は、まさに神からの贈り物（それにしては痛すぎましたが）だと言えます。

自分の命くらい自分で何とでもなると思っていたのに、命乞いする自分は誰だ、そして私の本当の望みは何か。この病気を通してそう突きつけられ、考え祈る毎日を過ごしていた時に「あなたは私の愛する子だ」という神からの語りかけに出合いました。そして、手術や治療で、母として妻として士官として「十分にはできない」とか、病気でなくても社会や職場で「十分ではない私」、神に対して信仰も「十分ではない」、何をしても「十分ではない」と、役に立っているかいないかを自分の判断の基準にしていたため、霊的息苦しさを感じていたのだ、と気づかされました。私は今ここにいて神に愛されている「子」として、「自由」な確かな身分を与えられているのだと思った時、心と体と魂とが一つになりました。

病気よりも健康がいい、持たないより持っているほうがいい、できないよりできたほうがいいなど、自分で物差しをもち、それを振り回してきたのだと思います。しかし今はその「物差しありき」ではありません。持っていてもいなくても、病気であろうとなかろうと、できようができまいが、神の恵みと慈しみは変わらず、神に愛されている子として私は自由に生かされていることは、喜びであり感謝です。

今、奉仕している神田小隊（教会にあたる）で毎月「がん哲学カフェ」をしています。別名「ゆるカフェ」です。広く知られたいとは思わず、一人でも来る方がいればのんびりお茶でも飲みながら、がん、生き方、死について、悩んでいる事、嬉しい事、何でも安心して話せる場になったらな、と思っています。

がん哲学カフェのひとこま

創立者　ウイリアム・ブース　大将　リンドン・バッキンガム（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　スティーブン・モーリス（救世軍本営　東京都千代田区）

世界をみつめて

〈日本〉社会鍋へのご協力ありがとうございました

札幌での社会鍋

昨年12月、各地で社会鍋の街頭募金をおこない、皆様のご協力をいただきました。寄せられた尊いご献金は、年末年始また年間を通じて、作業所や施設への支援、災害時の緊急支援活動、街頭生活者支援、子ども食堂の実施などのために用いられます。

〈ルーマニア〉冬季支援

クリスマスの時期に社会鍋と支援活動がおこなわれました。昨年12月19日には、ブカレストの貧困地域に住む子どもたちに、生活を少しでも彩（いろど）り、希望をもつことができるよう、クリスマスプレゼントを届けました。また、ブカレストの夜間シェルターや仮設シェルターにいる街頭生活者の人々に、伝統的な食事（サワークリーム入りのサルマーレ、ケーキ、オレンジ）を提供しました。

〈ウクライナ〉サルティフカの住民支援

いまだ戦禍のなかにあるウクライナで救世軍は活動を続けています。ウクライナ東部ハルキウの救世軍の小隊（教会にあたる）メンバーは、昨年11月、最も壊滅的な被害を受けているサルティフカ地区の住民に支援物資を届けました。ロシアによる本格的な侵攻が始まって以来、砲撃を受け続けたこの地区での生活は、困難を極めています。ロシア軍が撤退した今でも、サルティフカには、行き場がなく、障害や病気のためにケアや配慮を必要としている人々が住み続けています。

サルティフカには至る所に戦争の傷があります。割れた窓、焼かれ、崩れ落ちた家々、そして人々の心の痛み。古いアパートに住むユーリは、今回の戦闘で家を破壊されました。救世軍は難民用の支援品セット（テント、ベッド2つ、寝袋2つ、テーブル2つ、椅子2脚、ガスボンベとコンロ、やかん、調理器具）を彼に贈りました。彼は家を修理する間、休む場所、料理する場所ができたことを喜んでいました。

今回は食糧支援に加え、このような難民支援品セットを10個配布しました。

〈アメリカ〉UPS従業員が救世軍エンジェル・ツリー・プログラムに参加

国際貨物運送会社のUPS（ユナイテッド・パーセル・サービス）はテキサス州とオクラホマ州の5つの都市で、救世軍のエンジェル・ツリー・プログラム（困難な状況にある子どもたちや高齢者へクリスマスプレゼントを届ける活動）にボランティア協力し、425人の子どもたちにクリスマスプレゼントを届けました。オクラホマ州のUPSの担当者はこう語ります。「このような配達ができるのは幸せなことで、誇りに思っています。これらの家族は私たちのコミュニティの一員であり、すべての子どもたちは楽しいクリスマスを過ごすに値（あたい）するのです。」

子どもたちへのプレゼントを手に

救世軍とは？ What is The Salvation Army?

心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、世界134の国で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウイリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えました。神と人とを愛し仕える働きは、今も変わりません。

日本では1895（明治28）年に英国から士官（伝道者）が来日して、救世軍の働きが始まりました。日本人で最初に救世軍士官となった山室軍平は、平易な言葉で聖書のメッセージを伝え、小隊（教会にあたる）を拠点として伝道を進めるとともに、廃娼（はいしょう）運動や結核療養所の設立をし、日本の医療、社会福祉分野での先駆者の一人にも数えられています。現在、日本では40の小隊、2つの病院、19の社会福祉施設を通して働きを進めています。

救世軍公報　ときのこえ
発行日　福音版／毎月1日、広報版／奇数月15日
定　価　福音版／1部40円、広報版／1部100円
（税込）　クリスマス特集号（12月1日号）／1部100円
振　替　00180－5－4400
発行兼　救　世　軍
印刷人　代表者　スティーブン・モーリス
編集人　山谷　真
発行所　救世軍本営　https://www.salvationarmy.or.jp
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話　03-3237-0881（代表）
Mail　jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所　ピーアンドエス
@SArmyJP　SArmy_JP　救世軍 The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会　救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。　・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。　・相談を希望します。